

# バルセロナ日本語で聖書を読む会

月報第136号 [2016年6月]

## さあ、湖の向こう岸に渡ろう

ルカによる福音書 8章22節

『そのころのある日のこと、イエスは弟子たちといっしょに舟に乗り、「さあ、湖の向こう岸へ渡ろう。」と言われた。それで弟子たちは舟を出した。』

+・・・+・・・+・・・+・・・+・・・+・・・+・・・+・・・+・・・+・・・+・・・+・・・+・・・+・・・+・・・+・・・+  
主の聖名を賛美します。バルセロナ日本語で聖書を読む会の月報第136号をお送りします。今月もルカ福音書の学びを進め、「平地の説教」として知られる「幸いと不幸」について語ったイエス様のみ言葉を学びました。

旧約時代、イスラエルの民は半分がゲジリム山、あとの半分がエバル山に上って、モーセが人々のために記した教え = 祝福の道と呪いの道 = の写しを読み上げるのを聞いた。(申命記 11:26-29、ヨシュア 8:30-35) その教えとは、主の教えを忠実に守るものは祝福を、主の戒めを聞かずに他の神々に従うなら呪いを受けるというものだった。

かつてモーセが山に籠って神から十戒の教えをいただいて下山すると、民はモーセを待ちくたびれて神をはなれ、金の仔牛像を作って拝んでいた。今回学んだルカ福音書のテキストでも、主イエスが山にこもって徹夜の祈りを捧げ、12人の使徒たちと山を下ると、異教の教えに走っていたガリラヤの民が待っていたという状況は、これに似ている。



彼らに語った主イエスの教えは、貧しい者、飢えている者、泣いている者、主のために憎まれる者は幸いであり、富むもの、満腹している者、笑っている者、人にほめられる者は不幸である、という内容だった。前者はまさしく、ローマの圧政に痛めつけられて貧困の中を歩む群衆の気を引いた。しかし主はそういう貧困について言及したのではなかった。

人はどれだけ裕福になろうと地位を築こうと、死ぬ日が来れば裸一貫になって神の前に立つ。この時の事を思って、異教の神に走った我が身の罪を悔いて泣き、神から背を向けて生きてきた自分は、神の前では何の富も摘まなかった者で、霊に於いては乞食同然であることを認識し、神のみ言葉と愛に対して激しい飢えを感じる者。そのように神を求める者は祝福を受ける。

一方で、事業に成功し、地位と富を築き、イエスマンに囲まれ、権力を振り回して自分の財を増やすことに執着する者、彼らは積み上げた富を自己の実力とみなして他をさげすみ、誰をも信じず、何者をも近づけない。もちろん神も必要としない。そのような者は死んで神の前に立った時、真の意味で何の富も築かなかったことを思い知らされ、永遠の時を不幸の中で生き続ける事態を嘆くことになる。(黙示録 3:17)

主イエスが教えたかったのはこういう事だった。そして貧しい者には神の国が与えられるとおっしゃった。「神の国のメンバーになる」のではなく、「神の国はあなたのものである」という言葉の意味は、主に信頼する者が、神の国の特権をこの世で行使して生きようになるということ。このような祝福に至る重要な条件が、<心の貧しい者> であるということなのです。

主は今、私たちに、「あなたは自分が霊的に貧しいと感じて神を呼び求めているのか、あるいは自らの霊性で自分が神の前に不足するものは何もないと自負しているのか」と問いかけておられる。